



「笹川杯作文コンクール2011」～中国語で応募～ 第3回優秀賞作品

「一碗からピースフルネスを」

上海市 李笠藜

日本の「3.11」大震災関連報道に、「日本の大地震が文化にもたらした痛み 128件（箇所）の文化財に深刻な被害」と題されたニュースを見つけた。今回被災した文化遺産には、茨城大学五浦美術文化研究所岡倉天心旧居も含まれている。

岡倉天心（1863－1913）は明治時代の著名な美術教育家で思想家であるが、私が英語で記し1906年にニューヨークで出版した『The Book of Tea』を読んだことがあるので、かねがね彼の名前を知っていた。同書は20世紀初頭に欧米へ日本文化を紹介した重要な著作のひとつで、その後、多くの言語に翻訳された。深遠な影響力を持ち、今でも再版書が出回っている。100ページにも満たない薄い本には、茶道という伝統文化の独特な審美眼や、茶室、生け花、茶道の大家などの概要が紹介されていて、日本の茶道を理解するための啓蒙的な読み物として、読者に与える印象は深い。その冒頭、第一章の標題は「一眼に人情を見る」となっている。

しかし、岡倉天心には今でも世間から非難されている点もある。彼が著書『東洋の理想』で提示した「アジアはひとつ」（Asia is one）の観点が、第二次大戦における日本の侵略政策思想の源だとされているのである。こうした非難の原因は、アジア文化の観点を誤読し乱用したことにあるのかもしれない、という研究者も当然いる。

岡倉天心の功罪については、賛否両論だが、彼が設計し「茨城百景」に名を連ねる六角堂は、今回の大地震で津波に吞まれてしまった。

しかし、茶道はその根強い生命力により日本で伝承され続けており、現代の中日文化交流においても重要な地位を占めている。特筆すべきは、茶道が民間において盛んであるだけでなく、正式な国交においても一定の地位を得ていることである。

2008年3月、胡錦濤主席が「中日青少年友好交流年」のオープニングイベントの中で、中日の茶道実演を観覧し、両国の青少年に次のような言葉を贈った。「中国の茶芸は日本の茶道と方法は異なるが同じ効果を持っている。それぞれ特徴があるものの、いずれも「和」の精神を強調している。つまり、仲よく暮らし、調和して共生するという精神である。両国の青少年がお茶を縁に、和を以て貴と為し、相互の理解と友情を増進して、中日友好に多大な貢献をしてくれることを願う。

2011年5月、第6回東アジア茶文化シンポジウムが北京で行われた。参加した日中韓の学者達は、茶は文化の絆であるばかりでなく、調和した社会、ひいては平和な世界の絆でもあると認識を新たにした。お茶を媒介に日中韓の三国間交流をより進展させるべきだと発言する参加者もいた。

こうしたお茶をテーマとする友好交流活動は、1979年に初めて中国を訪問した現代の日本茶道界の第一人者である大宗匠・千玄室が提唱した「一碗からピースフルネスを」の理念と切り離すことはできない。この理念は数年に亘って広範に推進され、長い間実践され続け、広く認められている。

中日の茶道の源は極めて深い。今、中日の茶人が「和」の理念において再び偶然の一致をみている。2010年の上海万博では、中国の茶人がこれを機に集まり、国連館で「世界調和茶会」を成功させた。百か国に近い各国館のスタッフが代表で茶会に出席し、互いに茶を献上し合って、中国式的茶会と友好的な雰囲気を経験した。このイベントで出されたスローガン「一つの地球、一つの国連、一杯の中国茶」は、世界平和への祈りを示すものである。

以上のいずれにおいても、茶道という伝統文化の表現様式は根強い生命力により今まで伝えられ、平和の使者に演繹されるようになったことが改めて示されている。現代の茶事は盛んであり、中日の茶人がお茶を仲人にお茶を縁に結ばれ、中日の茶道はまた期せずして一致して「和」の精神を広めている。

岡倉天心が世を去っておよそ百年、『The Book of Tea』の登場からも既に百年余り経つが、その記念建築は今回の大地震で損なわれてしまった。お茶は、東方文化の特色をよく備えた、平和を象徴する小さな葉っぱであるが、とどまることなく中日両国の間を往復し、世の人に東方の美学を広めるのみならず、平和と友好に対する憧れを伝えてきた。「一服に人情を見る」から「一碗からピースフルネスを」まで、世の中の形ある物は作られ、存在し、壊れ、無に還ることを避けることはできないが、人々が平和を求める願いは代々ずっと伝わっていくのだとことを思わせずにはおかない。